

2020年8月16日（日）「人格的交わりの強さ・豊かさ ～同志の必要性～」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 4:9-12

9 一人より二人のほうが幸せだ。共に労苦すれば、彼らには幸せな報いがある。

10 たとえ一人が倒れても、もう一人がその友を起こしてくれる。一人は不幸だ。倒れても起こしてくれる友がいない。

11 また、二人で寝れば暖かいが、一人ではどうして暖まれよう。

12 たとえ一人が襲われても、二人でこれに立ち向かう。三つ編みの糸はたやすくは切れない。

《新改訳 2017》伝道者の書 4:9-12

9 二人は一人よりもまさっている。二人の労苦には、良い報いがあるからだ。

10 どちらかが倒れるときには、一人がその仲間を起こす。倒れても起こしてくれる者のいないひとりぼっちの人はかわいそうだ。

11 また、二人が一緒に寝ると温かくなる。一人ではどうして温かくなるだろうか。

12 一人なら打ち負かされても、二人なら立ち向かえる。三つ撚りの糸は簡単には切れない。

【序論】

今日扱う箇所は、以前に結婚式の中で語ったことがあり、懐かしく思い出していました。今回は講解説教の文脈上で扱いますので、当時とは少し違った読み方になるのではないかと思います。聖書の御言葉は、同じ人が同じ箇所を読むにしても、その人に加えられた知識、経てきた人生経験、置かれている状況によって、異なる読み方になることが少なくありません。時には大きく解釈が変わることもあるでしょう。それはそれでよいのであって、その説教者がその時にしか語るることのできない説教が神の導きによって作られているのであります。5年前の説教を読み直して未熟に思えたとしても、その原稿は大切にしないでなりません。自分の成長の過程が見えてくるからです。その意味で、今回は神様がどのような言葉を自分に与えてくださるのかに期待しております。

【本論】

この箇所を文脈で捉えていきますと、前回の「孤独な守銭奴」の生き方を是正していく内容であることが分かります。友もなく、自分のためだけにお金を集めることに腐心する人の淋しい人生を正す役割を果たしています。

一人より二人のほうが幸せだ。(4:9a)

このフレーズを読んで誰もが連想するのは結婚ではないでしょうか。「幸せだ」「まさっ

ている」と訳された言葉は原文では「טובים／トーブーム」で、「良い」を意味する「טוב／トーブ」の複数形です。「二人は一人よりも良い」といったニュアンスでしょう。もちろん、結婚はその最高の実例であり、十二分に適用されうるものです。私が結婚したときに、身近な牧師が「結婚は『1+1=2』というレベルのものではなく、『1+1=10』にもなる祝福だと言ってくださったのを覚えています。ただ、ここで著者は結婚だけに限定して語っているのではなく、より広い意味での「仲間の必要性」を強調しているようです。以下にその根拠が4つ挙げられていきます。

本論A. 四つの根拠

①共に労苦する報い

共に労苦すれば、彼らには幸せな報いがある。(4:9b)

ここに出てくる「**労苦**」(אמל／アーマール)と「**報い**」(סָרַח／サーカール)という二つの単語は経済的な用語であり、ビジネスパートナーをイメージさせます。「報い」は「賃金」「給料」とも訳せる。誰かのために労することは、人の役に立つ喜びという結果を得ます。自分だけのために働くとき、その喜びは自分の中だけに留まるものとなるでしょう。人間は「誰かに喜ばれたい」という欲求を持つ生き物であり、そこには利害を超えた愛の本質があります。この心の充足というものは科学的に説明しきれない領域であり、人間が人間たる所以、交わりを喜ぶべき存在として造られている表れと言えるでしょう。二人で何かを成し遂げたときの喜びは、一人だけでの喜びをはるかに上回ります。交わりなくして人間は真に人間たり得ないのです。

②困難な状況での助け手

たとえ一人が倒れてももう一人がその友を起こしてくれる。一人は不幸だ。倒れても起こしてくれる友がいない。(4:10)

ここでは、何らかの苦境に立たされたときの「助け手」としての「友」の重要性が教えられています。「倒れる」という事柄は、物理的に躓いたり落とし穴に足を取られたりすること以上に、事業の失敗、判断の誤り、挫折、降りかかる災難、病、誰かからの敵意など、人生における様々な苦境を指す言葉でしょう。苦しんで精神的に追い詰められているとき、傍にいてくれる友の存在ほどありがたいものではありません。黙って話を聞いてくれて、一緒に涙を流し、時に慰め、時に励ましてくれる。私にも幾人か、そのような友の顔が思い浮かびます。

③寒空の下で温め合える

また、二人で寝れば暖かいが、一人ではどうして暖まれよう。(4:11)

ここでは「旅人」がイメージされており、中東の冷え込む夜空の下で野宿をする羊飼いたちの震える姿が想像できます。気が合わない人同士であったとしても、互いに寒さを凌ぐために肩を寄せ合うことはできるでしょう。一人では自分の体温以外に頼るところがなく、「寒いね」と言い合える仲間もなく、より寒さが身に滲みます。

④戦いに立ち向かえる

たとえ一人が襲われても、二人でこれに立ち向かう。(4:12a)

ここでも著者の念頭には「旅」の状況があります。ある町から町へ移動する商人でしょうか、国の法的管理がない地域を通らなければならないことがあったようです。主イエスの「良きサマリヤ人」の譬の中にも、エリコの町へ向かう途上で強盗に襲われた人の話が出てきます。一人で移動することは危険であり、捕まって身ぐるみ剥がされてしまう悲惨なケースがあったようです。一人では、荷物を抱えていたり、身動きが取りにくかったりして為す術がありませんが、もう一人一緒にいてくれることでどんなに心強いことでしょうか。二人なら戦う勇氣と力が湧いてきます。

以上のように、コヘレトは四つの例によって、一人よりも二人の方がまさることを説明してまいりました。しかし、話はこれで終わりではありません。

本論 B. 三人は二人にまさる

三つ編みの糸はたやすくは切れない。(4:12b)

この箇所は何と、二人を超え、三人寄るところの更なる優位性をもって締めくくられるのです。おそらくこれは、当時あった格言の引用だと思われませんが、古代のシュメール文書である「ギルガメシュとフワワ」の中にも「誰も三つ縊りの縄を切ることはできない」という表現が出てくるようですし、日本にも「三本の矢を束ねると容易には折れない。だから三人が力を合わせて生きるように」という毛利元就の言葉が残されているようです。現代でも「三人寄れば文殊の知恵」ということわざが使われます。これは、凡人でも三人集まればすばらしい知恵が出てくるという意味です。

「3」という数字について、少し考えてみましょう。私たちが知っているように、綱引きなどで用いられるロープは三つ編みになっています。いつ誰が考えたかは知りませんが、人類史の中で「三本を縊り合わせると強くなる」という生活の知恵を見出した人

がいたのでしょう。女の子が髪の毛を三つ編みにするところにも、「二つ編み」では実現できない美しさや安定性があるのではないか。カメラの三脚も、二本足では不安定ですが、三本目があることでしっかり立つことができます。

よりキリスト教的に捉える人もいて、ここには「三位一体」なる神とか、「信仰・希望・愛」が暗示されていると言われることもあります。読み込み過ぎであるにしても、「3」は教会史の中で神聖な数字とされてきた事実があります。

しかし、時として「三人」であることは不利に働くこともあります。常に二対一に分かれる危険性を孕んでいるのです。私が高校生の頃、同じ部内に同級生が三人いましたが、二人になるとそこにいないもう一人の悪口を言うということがいつも起きていました。大学生の頃、お世話になった吉持章先生のお宅に複数の学生たちで招かれたときに、クリスチャンの結婚観をお話くださり、「夫婦が面と向き合うとぶつかりやすい。間にイエス様に立っていただき、イエス様と夫婦の良い『三角関係』を築きなさい」と言われたのを覚えています。

いずれにせよ、「三つ縊りの糸」のイメージは、人間関係を通して増し加えられる力について語っているのであって、人の交わりがあるところには「強さ」があることを教えているのです。主イエスも言われました。

また、よく言うのが、**どんな願い事であれ、あなたのうち二人が地上で心を合わせるなら、天におられる私の父はそれをかなえてくださる。二人または三人が私の名によって集まるところには、私もその中にいるのである。**（マタイ 18:19-20）

【結論】

神がアダムを創造されたとき、当初彼は「独り」の状態を味わいました。神は敢えて彼に「欠け」を経験させられたのです。他のどんな動物にもアダムの心を満たすことはできませんでした。そこに人格的な交わりがなかったからです。

人はあらゆる家畜、空の鳥、あらゆる野の獣に名を付けた。しかし、自分にふさわしい助け手は見つけることができなかった。（創世記 2:20）

そこに連れて来られたエバによって、アダムの人格は完成に至りました。人格と人格の生きた交わりがあったからです。神の人間創造の目的の一つは、互いに交わりを持たせるところにあります。神のかたちに創造された人間は、神ご自身の中で交わりがあるように、愛し愛される存在を必要としているのです。コヘレトは読者をこの神の目的に立ち返らせようとしている。そして、その交わりの中心に神を置かせようとしているのです。

【祈り】

交わりの神よ。あなたの内にある聖なる交わりに、私たちをも招き入れてくださっていることを感謝いたします。同じ御霊を持つ者同士が交わるならば、そこにはどんなに大きな霊的喜びが生まれることでしょうか。しかし、自分自身では望んでいなくとも孤独を味わっている人々がおられます。人に囲まれて生きていながら、実は孤独に苛まれていることもあります。どうか、主がその心に御声をかけてくださり、神の民の交わりに招き入れてください。私たち自身も、与えられている家族、教会、職場、学校、様々なコミュニティにおける人間関係を大切に、すべてのところに神の臨在を祈り求めてまいります。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
人間を人格的存在として創造し、神と人、人と人との交わりにあずからせ給うた、父なる神の愛、
罪によって損なわれた関係を取り戻させるため、世に降り給うた、主イエス・キリストの恵み、
二人または三人集まるところに、ご自身も共にまし給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。